

「本作品に登場するのはソフトヤンデレです。過激な表現やセリフは半分くらい演技になります。流血表現・残酷描写はありませんが、性的な表現はあります。」

●ヒロイン（行乃）

情緒不安定なヤンデレに見えるが、半分は演技。もう半分は素。

オタク気質があり、自分のペースになると止まらない。急に早口になる。

やや執着心が強く、やや思い込みが強く、かなり情熱的。本人は否定しているが、ヤンデレとしての要件を十分に満たしている。自分に自信がない反面、相手に無尽蔵に愛を捧げようとする。

時折恥ずかしいセリフを吐いて、陰で後悔している。そこを指摘すると部屋から出てこなくなる。性知識に関してはエロ漫画やエロ小説が中心。淫語が苦手なのに積極的に使おうとするため、やはりどこかたどたどしい。

歳の割には巨乳だが、比較できる友人がいないため、漫画やアニメなどと比較して貧乳だと思いついでいる。あとファッションセンスや色彩センスはない。

00. ある日の昼休み

「ねえタ子ちゃん。媚薬って、ネットで買えるのかな？」

私のつぶやき程度の質問に、机を向かい合わせて昼食を頬張る少女は一瞬固まった。

「何で？」

腹を探る一言に、私はモノカラーの弁当を一旦机に置いて答えた。

「やりたい事があるんだけど、ちょっとね」

彼女は口に含んだ惣菜パンを飲み込み、私の目をじっと見ていた。

「それって、聞いても大丈夫なやつ？」

「大丈夫。いつまでも進展しない知り合いにサプライズしたいだけだから」

サプライズの内容が知りたいんだけど……、と彼女の瞳は語っていたが、私はあえて無視した。

「……ふうん。で、なんで私に訊いたの？」

「だってさ、」私はグラウンドを横目で見て「そういうの、必要そうだと思うって」

私の視線に釣られて、彼女も窓下のグラウンドで走る男子たちを睨め直した。そしてそこに自分の弱点となる人物がいないことを確認すると、いつもの——誰にでも親しげな、仮面みたいな笑顔で私に応じた。

「へえ。じゃあ、お門違いじゃないかな？」

「あ、先生！」

「え！？」

「冗談だよ」

「……っ」

彼女は普段の余裕ある態度から一変、あからさまに挙動不審になり、視線をあさつての方向に逸らした。

「知ってるよ、先生よく男子たちと一緒に遊んでるもんね。タ子ちゃんって、昼休みはずっと外見てるでしょ？」

「……さあ、気のせいじゃない」

演技派の彼女は、一瞬だけ慌てたもののすぐに平静を取り戻していた。だが昼休み毎に再発する物憂げな視線は、同級の女子たちの好奇心を刺激するには十分すぎた。彼女の想い人は誰なのか、その話題はお決まりのテーマだった。毎日昼食を共にする私にとって、解答は容易であったが、誰にもその事を伝えなかった。理由は二つ。一つはタ子ちゃんに唯一対抗できる武器だったから。もう一つは……話す友達がいなかったから。

「そっか……そっか、じゃあべつに」

「うん、何とも思っていない」

これで隠しきれていると思っているのだろうか？ 彼女は頬を少し蒸気させ、横目でしきりにグラウンドを気にしつつ取り繕った。

「あ、ごめんね。おまたせ……」

私たちの会話にためらいがちに加わる小さな声。行乃(みちの)ちゃんはその声色通りの、小動物みたいなクラスメイトだった。大変な美少女で、顔面偏差値だけで最難関大学に受かりそうなレベル。夕子ちゃんの健康的な可愛らしさとは異なり、少し現実離れた美しさと、彼女の引っ込み思案で壁を作る性格のために、未だに友人がいないようだ。

そんな行乃ちゃんと夕子ちゃん、それから私はいつも3人で昼食をとる仲である。……友達はいないと言ったが、昼を共にする相手はいる。行乃ちゃんは私の友達ではなく、夕子ちゃんの友達。姉御肌の夕子ちゃんを慕う人は多い。例えば先生もそう。私や行乃ちゃんのようなクラスに馴染めない生徒に対して、先生は夕子ちゃんをけしかけて無理やり孤独を奪う。独りが好きなんて神経症的な言い訳は許されず、気づくと夕子ちゃんのペースになっている。夕子ちゃんはそんな面倒ごとを毎回嬉しそうな困り顔で引き受ける。たぶん、きっと、間違いなく、夕子ちゃんは先生が好きなんだ。彼女のバッグには先生の好物がいつも入っているし、結局誘えなかったペアチケットはノートの最後のページに隠してある。あまりにもいじらしい「恋する乙女」つぷりに、こちらまで恥ずかしくなってくる。

「……二人とも、知ってる？」

あどけない表情の少女たち。どうにかしてその顔をメスにしてやりたくなり、私は思いつきのままに言葉を繋いだ。

「病んでるとモテるらしいよ。ヤンデレってやつ」

まるっきり嘘ではない。多少闇を抱えた女性は、頼られたがる男性に受けが良いらしいし、恋への猛進に押されて折れる男も多いだろう。二人にはどこか危うさがあり、一步間違えばナチュラルに病みそうだと常々思っていた。私の発案で二人をどうにかしてやりたい。そんな甘い目論見に、二人は真剣に顔を見合わせた。

「ヤンデル？ エンドウマメ育ててそう」

「あっ、答え言わないで、調べるから」

無知か。

夕子ちゃんは懷からそっと取り出した携帯で検索をかけると、行乃ちゃんと並んで画面を眺めていた。速読ができる夕子ちゃんは、いち早く読み終わり一生懸命文字を追っている行乃ちゃんを置いて、真剣な顔で私に向き直った。

「心療内科に通わなきゃダメかな？」

違う、夕子ちゃん！ ボダ(※1。境界性パーソナリティー障害のこと)じゃなくて、「ちょっと執着心が強めかなー」くらいの！

私は大きくため息を吐き、でも夕子ちゃんの間隙を突くのだけは忘れなかった。

「ガチじゃなくても大丈夫だよ。……それにしてもヤンデレになってまで、一体誰とイチャイチャしたいのかなあ？」

「いや、その……一般論として、えっと、モテたら嬉しいかな、って」

言いながらも彼女の視線は運動場にスライドしそうになり、私たちに気取られまいとあ

ちらこちらをさまよっている。

「ねえ行乃ちゃん、夕子ちゃんって誰が好きだと思う？」

「ちょっと！ 行乃に変な話題振らないでよ！」

行乃ちゃんはようやくヤンデレの項目を読み終えたようで、状況をあまり把握していない様子だった。

「えっとね、えっと……」

「行乃も考えなくていいから！」

慌てる夕子ちゃんを尻目に、私は再び運動場を見下ろした。ジャージ姿の先生が、男子に混じってボールを追いかけている。嗜虐心と言う名前の憧れが、私の口をついて出た。

「先生、今日もカッコいいよねー」

やや棒読み、呟いてみる。夕子ちゃんの表情が強張り、私を試すように幾度か目が泳ぐ。

「今度はホントに来てよ。ほら、そこ」

夕子ちゃんが訝しんだのは先生がいるかどうかではなく、私が先生に気があるかどうか。でも私はそれを分かっているが訂正も何もせず、むしろ行乃ちゃんと一緒に追い込みにかかることにした。カッコいい夕子ちゃんも好きだけど、私が見たいのはアワアワで、チョロい夕子ちゃんだもん。

「行乃ちゃんも先生カッコいいと思うよね？」

「あ、う、うん。えと、かっこいい……。そう、だねっ」

行乃ちゃんは私が期待した以上の反応を見せてくれた。頬をかすかに上気させ、たどたどしく言葉を紡ぐ姿は、まさしく恋する乙女だった。

「そ、それ本気？ 先生なんかが、いいの？ だって、職員室の机は汚いし、草食系だし、女の子のことなんて何にも分かってないよ？」

どうしてクラスメイトはこんな「ポンコツ夕子ちゃん」略して「ポ夕子（ぽたこ）ちゃん」の想い人が分からないのだろうか。それともみんなで分からないふりをしてあげているのかな？ 確認できる友達がいないのが悔やまれる。

「え、でも、先生、優しいし……それに、このあいだ家の前まで送ってくれた……えへへ」

「あ、あ……」

夕子ちゃんは大きな目を見開いて、言葉にできないなにかを表現しようとしているように口をパクパクと動かしていた。もうひと押し！ 私は友人の友人に心の中でエールを送っていた。性格が悪いのは分かっているけど、普段強気で凛々しい夕子ちゃんが右往左往する場面は、大変可愛らしいし楽しい。

夕子ちゃんの挙動不審っぷりはクラスの空気にも伝わり、幾人かがこちらの席を伺っていた。それを察した聡明な彼女は、「ちょっと！ 席外すね……」と場を仕切りなおすことにしたようだ。

夕子ちゃんの後ろ姿を見つめ、私は小さな声で行乃ちゃんに声をかけた。

「ナイスファイト！」

「え……？」

キラキラと輝く翠瞳で、行乃ちゃんは無垢に首を傾げた。チクショウ、可愛いなあ。そう言いたいのを飲み込み、私は上部だけの笑顔を浮かべた。

「なんだ、分かってなかったの？ ほら、夕子ちゃんの焚き付け加減、良かったよ」

「たきつけ？」

しかも天然か。無垢で、天然か！

「ああ、いやいい。大したことじゃないから」

「あ、うん。……ねえ、ところでさ」

「ん？」

「夕子ちゃんって、もしかして、先生が好きなの？」

「……本当に気づいてなかったんだ」

私は再度グラウンドに視線を下ろした。見慣れた少女が早足に昇降口を抜け、走り回る先生を呼び止めている。

「あ、じゃあ、これ、内緒にしないとね」

行乃ちゃんは幸せそうに笑った。彼女が笑うと、背景にキラキラとか花が舞うから勘弁してほしい。バイセクシャルだと自認している私だけど、行乃ちゃんを見ているとガチレズになりそうで怖い。

「行乃ちゃんは先生好きじゃないの？」

「え、好き、だけど。……でも、夕子ちゃんのとは多分違うから」

「はあ」私も、そんな少女漫画みたいなセリフ言ってみたいなあ。「じゃあ応援してあげるんだ？」

「うん、ちょうどね、いい薬持ってるの！」

ん？

「ロヒプノール（※2。睡眠薬）って言ってね、ジフェンヒドラミン塩酸塩（※3）みたいな睡眠導入剤じゃなくて、飲んだらホントに起きないの！」

んん？

「お医者さんで処方されているのだと、液体に混ぜた時に青くなるように青色1号が混ぜてある（※4）んだけどね、ほらコレ！」

んんん？

「ジェネリック（※5）のを個人輸入（※6）したやつ、貰ったんだ（※7）。割っても中も真っ白！ 無色透明だから混ぜてもバレないの！」

どうして……この子はこんなに楽しそうなんだろう？ というかこんなに喋れたんだ。

「先生の飲み物に混ぜれば、好き放題できるよ（※8）。既成事実も多分簡単に作れちゃう！ 夕子ちゃんに分けてあげよう！」

ああ、この子に友だちがいないのはコレのせいだ。美貌とか、性格とか、それ以前の問題だった。夕子ちゃんは、多分監視役。この子……目的の為なら手段を選ばないタイプの人種

だ。

私はなけなしの良心を振り絞って、苦笑いを浮かべた。

「たぶん夕子ちゃんがしたいのは純愛だから、」そう言いながら再度グラウンドを横目で見ると、奥の木陰で、先生と夕子ちゃんが並んで腰掛けていた。ここからでも、彼女が相当に緊張していることが見て取れる。

「お薬は、私と行乃ちゃんだけの内緒にしようか？」

やや不服そうな面持ちで、行乃ちゃんは私を見つめ、「でも、私だって純愛……」と口の中で呟いた。

「愛は人それぞれだけど、相手の意思も尊重しないとね。無理やりよりもラブラブの方が、きっと気持ちい——ステキだよ」

心にもないフォローを入れ、私は破顔した。笑顔なんて慣れていないから、どう見えているか分からないけれど。でも行乃ちゃんは緊張を解き、可愛い顔で微笑み返した。

「うん。そうだね。分かった」彼女は菓子のフィルムをポシエットにしまうと、「起きてないと口移しとか焦らしプレイとかできないもんね！ お薬は縛るときだけにするね！」

間違いなく学校一の美少女は、影のある顔に卑屈な愛を貼り付けて笑った。病みの深い瞳を直視してはられず、私は顔をそらして口角を持ち上げた。

「……………ガンバッテネ」

「それでね！ さっきのヤンデレっていうの、もっと詳しく聞かせてもらってもいい？ どういう事言うと、男の人って喜ぶのかなあ？」

「え！？ えっとお……」

「教えて？ ね？」

ずずいと迫る美少女に、私はたじろぎ、そして……、

「う、うん、もちろんだよ。だって、その……友達だもんね」

心とか、何かそういうのが、折れた。行乃ちゃんの想い人さん。ごめんなさい。

※1 ボダ

ボーダーの略。ここでは重度の境界性パーソナリティ障害の意。洒落にならない。ただし軽度の心労でも、心療内科を受診することで楽になるケースがあり、「受診＝特殊」と思っているはいけない。

※2 ロヒプノール

フルニトラゼパムのこと。現在は医師の処方箋がなければ入手できない。アルコールと同時に摂取すると、昏睡と呼べるほどの泥酔状態になる。いわゆる「デートレイプ」で乱用されたことで悪名高い。

※3 ジフェンヒドラミン塩酸塩

市販されている睡眠導入剤の主成分。鼻炎薬として使われていたが、最近では「眠くなる」

副作用に着目した利用がされている。服用後、じわじわと眠気が増し、自然に入眠できる。

※4 青色1号が混ざっている

前述の性犯罪含め意図しない服用を防ぐため、国内で処方されるほとんどの睡眠剤には着色料が使用されており、一目で薬物が混入していると分かる。

※5 ジェネリック

海外製造の睡眠薬には着色料が使用されていない場合があり、特にジェネリック薬品には無着色のものが多く、そのため個人ジェネリック睡眠薬を輸入簡単すると、無色透明無味無臭かつ強力な睡眠薬が手に入ってしまった過去がある。

※6 個人輸入

現在、フルニトラゼパムの個人輸入は禁止されている。

※7 貰った

個人輸入した医薬品を他人に譲渡してはいけない。

※8 飲み物に混ぜれば、好き放題できる

フルニトラゼパムをアルコールと併飲すると、30分～1時間程度で強い眠気やふらつき、判断力の低下が現れ、そこから眠りに落ちるまでの記憶も混濁する。判断力が低下している状態では、レイプを拒絶することが難しく、その上傍目には合意に見えてしまう。しかもセックスをしたことすら記憶に残らないという、ある意味「エロ同人的催眠術」な状態。……もちろん、アルコールと併せて飲まなくとも、強い睡眠作用がある。睡眠障害にお悩みの方は医療機関で処方してもらい、自分に対して使用しましょう。